

進藤ヒカルに転生して しまった男の物語

ケーキの実

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世で過労死した男が転生する事になった。

異世界にでも転生するかと思っていた男だったが、転生先は漫画の世界だった。

これは困碁の世界に転生した男の物語。

目次

第04局目	第03局目	第02局目	第01局目	プロローグ
55	41	29	12	1

プロローグ

転生。俗に言う生まれ変わって新しい生を受けると言われているアレである。

俺は前世で社会人として、そして社畜として勤労に勤しんでいた。

そんな勤労も長時間労働にもなれば心身ともに疲労が増してしまふ。

だが、大学を卒業し内定ももらえた会社がここしかなかったから仕方ないのかもしれない。

例え、ブラック企業だとしても嘔り付いた。俺は前世では恵まれた家庭で産まれなかった。

両親はギャンブルや酒などにハマり墮落した生活を送っていた。

そんな両親が俺をただの子供して接してくれるはずもなく、暴力、罵倒は当たり前の日々。

高校は公立に通っていたが俺の時代ではまだ無償化になっておらず自腹でアルバイトしながら学費を払い通った。

そのまま高校で就職しても良かったが、両親の低学歴の様子を見ているだけで最低大
学は出ようと決めていた。

だが、そんな生意気な事は両親には通じず高校出たら働いて家にお金を入れろと言われてしまった。

それから色々調べた結果、奨学金により学費を負担し部屋を格安で借りれる所を決め家を出た。

大学に入学してからはアルバイトと学業の日々を送り、サークル活動する時間は取れなかった。

4年の大学生活も終わり、唯一内定を貰った中小企業に就職した。

案の定、働いてからはブラック企業だと分かったが家を出た手前辞めて住処をなくすことの方が恐ろしかった。

最近では頭痛を頻繁に襲い、寝辛い毎日だった。

そして俺は過労死で死んだ。

軽く回想を振り返り思い出していた。

どうやら不遇の人生を歩んでいた俺にもう一度人生を歩ませてくれるみたいだ。

ある書類に記入し俺は転生した。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

そして俺は転生した。

生まれ変わって5歳になったが当時は前世の記憶がない、転生する前にあらかじめ幼児生活を遠慮した。

やっと5歳になり俺は前世の記憶を思い出していた。それで一番の驚く点は俺の名前だ。

進藤ヒカルというのが今世の名前。俺の記憶でピンと来た。ヒカルの碁だと。

どうやら俺は異世界でもなく現代日本ではなく漫画の世界の日本に転生したみたいだ。

しかも主人公の進藤ヒカル。

部屋を出て1階に降りてリビングにいる両親に朝の挨拶をした。

「父さん母さん、おはよう」

「おはよう。ヒカルどうしたの？朝の挨拶なんて珍しいわ」

母は首をかしげるも挨拶を返した。

「おはよう」

父は一言だけ返した。

朝食を済ませ、父は会社に行き俺は母に連れられ幼稚園に向かっていた。

「ねえ、母さん」

「なーに？」

「あのね僕、今日爺ちゃん家行きたい」

「お義父さんのところ？急にどうしたの？」

「ひーみーっ」

そう言った俺に「仕方ないわね」と幼稚園の帰りに寄って貰える事になった。

幼稚園に着いたらアイツが待ち構えていた。

「ヒーカール！おそーい！」

幼馴染の藤崎あかりは膨れた顔で俺見て憤慨していた。

「仕方ないだろ。ちよつと話しながらゆっくり来たんだからさ」

「もうそうやってムズカシイ事ばかり言って」

「じゃあヒカル、また後でね」

手を振った母を見送った。

◇◇◇◇◇◇◇◇

子供の体力を舐めていた。俺も子供だが脳は発達してるせいか温存の為にセーブし

て遊んでいた。

だが、奴ら子供らはエネルギーをフルに使用し遊びまわっていた。

これはさすがにキツイ。これから爺ちゃんの家に行かないけないな。

「ヒカル!」

母が迎えに来た。やっと帰れる。

「さあ、帰ろうか」

「うん」

「ヒカル待つてー!」

幼馴染という名のアイツがやってきた。

「なんだよあかり」

「私も一緒に帰りたいの!」

「すいません進藤さん」

あかりの母がうちの母に苦笑しながら頭を下げ、それを母がまた首を振って笑った。

「いえいえ」

「あかりさー、今日は爺ちゃんの家に行くんだぞ?」

「いいもん。それより早く早く!」

「うわあ、ちよ」

あかりに手を引かれ走らされる進藤ヒカル。

前世28歳のおっさんが幼女に連れ回される図である。

「うわあー久しぶりにキター」

「もう、ヒカルはいつつも大袈裟」

「仕方ねーだろ。そう思ったんだからさ」

縁側に爺ちゃんが座っていた。

古き良き日本家屋。整った庭が前世で良くしてもらったおじいさんの家を思い出し
少し涙ぐむ。

「どうした？ヒカル」

「なんでもない」

「ほう。そうか。それより今日はどうした？」

「んとね。爺ちゃんの家にある蔵に入ってみたくて来たんだ」

「蔵か。あそこは危険だぞ？」

「何が危険なんだよ爺ちゃん」

「お化けが出るんじゃないよ」

「え？」

後ろで聞いていたあかりが絶句した声音を出し後ずさった。

「そんなの信じねー。それより入らせてよ」

「まあ、仕方ないか。但し蔵の中の掃除も手伝ってくれるかね？」

「手伝う手伝う。から早く入れてよ」

蔵の前に到着した。古い。煤けた蔵で、歴史の面影が見える。

「おい。ヒカル着いてこい」

「わかってるよ」

「よし、ここの重い荷物はじいちゃんがやっておくからヒカルは其処の小物をやりなさい」

そう言つて爺ちゃんはこの場から離れて処分する荷物を外に持ち出していた。

黙々と整理する俺。

蒸し風呂のような暑さ。こんな事やる為に来たんじゃねーのに。

頭を掻きむしつて暑さに立ち上がった。

「うがああああおあ!!」

「うわあ。もう、ヒカル。急に声を出さないでよ」

「暑くて暑くてたまらないんだよ。それよりあかり手伝えよ」

「ふーんだ。ヒカルが頼まれた仕事なんだから私が手伝ったら意味がないじゃない」
「ぐぬぬ」

「つとと。あぶねえーな。何だこれ」

汚ない碁盤だな。は？碁盤？

そうか。これが碁盤か。

やつと見つけた。

「何だこの汚れ」

赤い汚れがその碁盤に着いており、これが原作通りなら血だな。

「ー見えるのですか？

「は？」

「ー私の声が聞こえるのですか？

「おい、お前。うるせえー。静かにしろ」

碁盤の中から出た平安時代の碁打ち、藤原佐為。

こういう演出か。

原作でも思ったがそれより女っぽいなコイツ。

——今一度現世に蘇られたことを感謝します

その言葉を最後に俺は氣を失った。

◇◇◇◇◇◇◇◇

それからは氣を失った俺を見たあかりが発狂し、爺ちゃんが登場した。

それについて来た母さんに心配されていたみたい。

病院に連れて行かれ熱中症だと診断されてその日は帰された。

爺ちゃんと母さんからは怒られあかりには泣かれた。

タクシーで家まで帰った。

前世と今世合わせて初めて乗ったタクシーであった。

倒れた原因である佐為に何度も何度も謝られた。

原作でそういう事態が起こると知っていた俺は許してあげたけどね。

それから佐為は自分が碁盤に宿った理由を語り出した。

はつきり言って興味ない。どうでもいいんだけどちゃんと聞いてやらないと原作み

たいに感情が流れて混んできて吐く可能性もあったから大人しく聞きに徹した。

藤原佐為は平安時代の碁打ちで相手の不正により都を追われ入水して自殺死んだと。生々しく聞かされる自殺光景にこいつは基地外だと把握した。

まあ、元々俺は佐為の力を使ってプロになるつもりだ。

囲碁には興味はない。だけど、安定した生活とお金は大好きだ。

前世では苦勞の苦勞の毎日だったが、このチート級の幽霊の力を借りればお金は稼げる。

消える云々は俺は対処方法も考えていたりする。

それはまた、後の話だ。

自室に着いて佐為に問いかけた。

『そんで、お前は囲碁をやりたいと?』

——はい!

『俺は囲碁には興味はないが、お前がやりたいならやつてもいい』

——ほ、本当ですか!?

『ただし、俺の人生をお前にやる代わりにお前も約束をしろ』

——何をですか?

『お前も俺に人生を捧げると』

ーそれ、囲碁をもう一度打てるなら

そう言つて爽やかに笑つた佐為に俺は黒い笑みを浮かべた。

やば、そう言えば現代だと囲碁のルール変更していたんだっけ？

『あー、佐為。囲碁のルールが今の時代では変わってしまったている』

ーヒカル、どういう事ですか？

『えーつと。黒だと5目が付くとかなんとか』

ーヒカルもあまり知りませんね、ここに囲碁の書物はないんですか？

『明日にでも、図書館行くか』

これは進藤ヒカルに転生した男の物語。

第01局目

あれから図書館に通い詰めたヒカルは佐為に現代の碁を学ばせた。資料を広げて佐為に言われるがまま捲った。

これも先行投資だと割り切った。

『ねえヒカル、ルールは学びました。早く打ちましようよ』

肩を揺すり出す佐為に驚愕する。

『は？ちよつと待てよ。何故触れるんだ？お前は幽霊だろ？』

『そんなの知りませんよ。それより早く、ヒカルー』

しれつとしてる佐為に思わず笑みが溢れる。

うちには碁盤ないし、どうしようか。

『じいちゃんがそう言えば碁打ちだつて言つてたな』

『ヒカルのおじいさんですか？ならさつきと行きますよ！』

図書館の帰りにじいちゃんの家に向かうことになった。

「おーヒカル。一人で来たんか。どうした？身体はもういいんか？」

心配そうに尋ねるじいちゃん。

「んにや。もう平気！」

「そうか。それで今日は何の用だ？」

「俺さ、碁をはじめたんだわ。もしじいちゃんに勝ったら碁盤買ってくれ」

じいちゃんの方に向かってドヤ顔で答えた。

「ご、碁じゃと？ちよつと待つとれ」

そう言つて部屋から飛び出したじいちゃん。

暫くすると碁盤を嬉しそうに運んでいた。

「勝ったら碁盤だったな。よかろう！この進藤平八の力を見ておれ」

『佐為、さつさと倒してくれよ。母さんに電話してないからあんま遅くなれないからな』

『分かつてますヒカル』

「どうした？ほらいくつでも石置いていいぞ」

石？ああ、ハンデか。佐為なら余裕勝ちできるけど、ここは置かせてもらうか。

取り敢えず10個置いてやった。すると横を見ると不満そうな佐為がいた。

『あのな、佐為。お前ならハンデなくても勝てるのは知ってる。だけど、いきなり孫が碁を始めて互先で勝利したらどうよ？不自然に見えるだろ』

『確かにそうですね』

未だに不満そうな佐為を無視してじいちゃんの方を向いて座った。

「それじゃあ行くぞヒカル」

『星ですか。私の時代ではありませんでした。研究された結果なんでしょうね』

『分かったから早よ打てよ』

『右下スミ小目』

『佐為さ、分かりづらいから手に持つてる扇子で指してくれない?』

『分かりました』

「ヒカル遅いぞ!」

じいちゃんから叱責されちまったよ。

それから圧倒的な棋力で佐為はじいちゃんに勝利した。

「……………つ。ヒカルお前」

囲碁初心者の俺には盤面はまだ打てる気配がするがどうやらじいちゃんが投了して終わった。

「ん?何?」

「強いな。確かにハンデありとはいえる確な打ち筋だったぞ」

「へへっ。そんじゃ、約束通り碁盤よろしくね」

「分かっている」

それから暫くじいちゃんと話して帰宅した。

「ヒカル、将来が楽しみだ」

ヒカルの去つて行く背中を見ながら笑いがこみ上げた。

孫バカと言われようが、ヒカルは本物だ。

「よし、先行投資として良い碁盤でも送つてやるか」

◇◇◇◇

自宅に着いたヒカルは佐為の方を向いた。

『どうだった？現世に蘇つてはじめての碁は？』

『はい！楽しかったです』

『そうか。まあ頑張ってくれや』

『いいえ。ヒカルも頑張るんです。ヒカルには教えることがあります！』

『は？ちよつと待てよ。俺に何をさせる気だよ』

『碁石の持ち方と打ち方、そして一番重要な置く場所を覚える事』

『確かに持ち方と打ち方は初心者の手つきのままだと恥ずかしいから直さないかもしれないが、碁の置く場所は扇子で指してもらえばいいよ』

『いけません！私と棋力が同じくした人の相手は集中力が入ります。そんな事は出来ません』

『分かったよ。覚えやー良いんだろ』

それから5年の時が経った。進藤ヒカルは10歳になった。

じいちゃんに勝利した次の週に本力ヤの碁盤が送られた事に俺も佐為も驚愕した。

佐為が言うには本物らしいから余計にな。原作だと足付きのそれなりの安い碁盤だったのに。

勝利した事で原作改変しちまったかな？まあ、どうでもいいか。

あれから毎日佐為と打っている。俺は碁のルールと打ち方を覚える程度しか碁をやらない。

だからある程度打てるようになった俺は佐為を連れて碁会所荒らしをしまくった。

佐為に打たせて全戦全勝。それを見ていた客は俺に何度も対局をせがんだ。

回った全ての碁会所では俺は無料で対局出来るようになった。

これで佐為が現代の碁を学んでくれればいいし、俺もそれなりの打ち方を出来るようになればいい。

まさに一石二鳥の作戦だ。

『佐為さ、大会に出てみない？』

『大会ですか？』

『小学生の部だけでもそろそろ実力を公にするのも悪くないしな』

『ヒカルは打ちたくならないのですか？』

『俺は碁を本気でやってないし、お前に全て任すよ』

本気でそう思っているヒカルであった。

楽しんで金を稼げればいいという考えなんだよな。

◇◇◇◇

大会当日。あいにくの雨模様。

失敗したかな。雨の中、大会とか糞めんどくさい。

『ヒーカル！ヒーカル！楽しみですね！』

若干一名、はしゃいでたりするが無視する事にした。

会場の中に入ると既にたくさんの子供とその保護者の親がたくさんいた。

この大会はランダムで選ばれた人同士で対戦し、勝ち抜けしていくトーナメント式である。

どうせ優勝するし、どうでもいいか。

指定された座席に座り、相手が来るのを待った。

暫くしてから一人の子供が対面の椅子に座った。

「時間です。始めてください」

運営の人の言葉で試合がはじまった。

『すごい！すごい！子供がたくさんですよ！私の時代では考えられなかった光景。囲碁は脈々と受け継がれていたんですね』

感慨深げに辺りを見渡している佐為。

『ほらもう試合はじまったから早く打て』

『はい！』

結果は優勝した。他を圧倒し、速攻終わらせた。

大人気ないと思われるかもしれないがこれが勝負の世界だと諦めてもらう。表彰式で賞状を貰って終わった。囲碁のプロも来ていて注目されたらしいがめんどくさそうなのでその場から退散した。

◇◇◇◇

「はい、これは!？」

運営のプロ枠として参加していた緒方精次は目の前の棋譜を見て絶句した。

これは本当に子供の打ち方だと言えるのか？

ありえない。あり得るはずがない。私でも見逃すこの手をノータイムで打った。

子供は早熟だと聞くがこれはおかしい。

先生の所のアキラくんでもここまでではない。

一人だけプロ級の棋士が参加していたと言われてもおかしくない光景だ。

面白い、進藤ヒカル。覚えたぞ。

◇◇◇◇

『はあー疲れたな。碁を打つだけでこんだけ疲れるんだな。考えて打ってない俺ですらこれだ。凄いな棋士達は』

『どうですか？ヒカルも囲碁の棋士を目指しますか？』

『だが、断る！俺の碁はお前にあげると言つたぞ。そんな事考えていないで現代の碁をもっと学ぶんだな』

『そーいや塔矢アキラと対戦したのはこの時期だったけ？』

『そろそろ原作の奴らと関わっていかないとな。』

『佐為は強いけど、原作だと様々な打ち手と打つて成長したし、その中には塔矢アキラも入っている。』

『明日は碁会所に行く事に決めた。』

『次の日の朝に佐為には出掛けるからついて来いと言つた。』

『目的地に着いた。佐為は辺りをキョロキョロしている。』

『ここですか？碁会所って事は今日も打てるんですか？』

『そういう事さ。ほら行くぞ』

『あら、いらつしやい。』

声をかけて来た受付のお姉さん。確か、名前は市河だったかな？

「名前書いてね。ここははじめてだよね？」

「ここははじめてだけど碁会所は散々巡ったよ」

「棋力を教えてくれる？」

「お？あそこに子供いるし彼と打たせてよ」

指を刺されてキョトンとしたオカッパの男の子。

「え？僕のこと？」

「俺と打たねーか？一応同年代の大会は優勝経験あるぞ」

「えー君、子供囲碁大会出たのね。それでもアキラくんはそこらの子供と思っちゃいけないよ」

「市河さん。僕が打つよ」

「分かったわアキラ君。あ、子供は500円必要よ」

「ほーら」

ヒカルは事前に知っていたので500円玉を市河さんに放った。

「奥で打とうか。僕は塔矢アキラ」

「俺は進藤ヒカル」

これが後に最強のライバルと言われる進藤ヒカルと塔矢アキラの初対局であった。

◇◇◇◇

「……ありません」

塔矢アキラは同年代ではじめての黒星を飾った。

「ありがとうな。これ俺の連絡先、また暇な時に対局しような」

ヒカルは連絡先を記したメモ用紙を塔矢のところへ置いた。

だが、放心状態の塔矢アキラには声が届いていなかった。

「え？負けたの？」

「アキラ君が負けたのかい」

「プロに近いと言われているアキラ君が？」

お客の騒然とした声が辺りを響かせた。

今尚鳴り止まない驚愕の嵐。

「ちよつと待つてよ。彼は一応子供囲碁大会で優勝した経験の持ち主だよ。アキラ君でも不調の時は負けちゃうでしょ」

「こゝ、子供囲碁大会だ?!」

アキラは父から将来の子供の芽を潰すかもしれないからと大会には参加させてもらえなかった。

だけど、彼みたいな強い棋士が同年代にいるなら。

ガタツと音を立てて立ち上がった。

ヒラヒラと先ほどヒカルがメモった紙が床に落ちる。

「し、進藤ヒカルの連絡先」

その紙には進藤の住所と電話番号が載っていた。

暫く向けていた視線を紙からあげる。

まだだ。今すぐに連絡しても既に遅い時間帯。

優等生なアキラは連絡を後日する事に決めた。

それから数日の時間が経った。

あれから何度も何度も対局した碁を並べた。

この一手も、この一手もまるで指導碁にしか見えない。

これが彼の本当の実力なら僕より遙か高みにいる。

同い年で既にこれだけの差が開いている。

気になる。すぐく気になる。ポケットに手をつ突っ込んだ。

彼に渡された連絡先。

「市河さん。少し電話を貸してもらえませんか？」

「いいわよ」

受け取った電話を片手に進藤の家に電話をした。

数コール後に進藤ヒカルが電話に出た。

「当たり障りのない会話した後にはアキラはヒカルに今から前対局した碁会所に来て欲しいと言った。」

「ヒカルはだるそうに返事をした。」

1時間経つても現れない。

アキラは居ても立っても居られなくなり店の外に出た。

すると、のんびり歩いてくる進藤ヒカルの姿が見えた。

「進藤ヒカル」

思いつめた表情でアキラはヒカルの顔を見た。

「塔矢か。それで何か用？呼び出したからには理由があるんだろ」

「君はプロになるのか？」

そう問いかけられたヒカルはニヤニヤと笑って返答した。

「ん？プロ？まさか塔矢はプロを目指してるのか？」

「なるよ」

「囲碁ってどれくらい儲かるの？」

これが一番聞きたかったヒカル。前世の記憶は曖昧であまりそこら辺のやり取りは覚えていなかった。

だから改めて訪ねた。ネットで調べる事が出来るが家にはPCがなかった。

「タイトル戦の賞金なら名人戦で2800万円、棋聖戦なら3300万円、全8冠タイトルータルで1億2000万円くらいだよ」

うっひよおおお!!前世は苦勞しても底辺だった俺は心の中ではしやぎまくった。チート幽霊の力で無双すれば金持ちになれる。

『佐為、契約を覚えているか?』

『はい。お互いの人生を相手に捧げるんですよね』

『そういう事。お前は俺の身体で囲碁をやり、俺はお前の力でお金を稼ぐ。等価交換な』
『分かっています』

「塔矢アキラ、俺はプロになるよ」

「……え?」

「そしてタイトルを全て手に入れるのも悪くないな」

「き、君はタイトルの重みが分かっているのか?その物言いは全ての棋士に対しての侮辱になる」

「あ、そう」

やけに熱くなっているアキラに苦笑してしまう。だって俺は本気で囲碁なんてやってない。

全て欲のためだけの碁打ちになる。

「何がおかしい。君が簡単に言っただけのけたその言葉は僕は忘れない」

「あのき、語ってくれてすまないが俺はお前より強い!そしてお前は俺より弱い」

「……くっ」

「タイトルに近いのが俺であり、遠いのはお前。どうやら指導碁を打たれたの気付いたらしいな。もし俺に意見したいなら勝ってからにしろ」

◇◇◇◇

そう言つて彼——進藤ヒカルは去つて行つた。

分かっている。彼が僕より強いのは。だけど、許せなかつた。

父の傍らでプロの苦悩に悩む棋士達。それを見て来たから分かる。

彼は本気で囲碁に取り組んでいない。欲を得るためだけにやっている愚物であると。

だからこそ、勝ちたい。彼に勝ちたい。僕は強くなりたい。

◇◇◇◇

『ヒカル。あそこまで言わなくても』

佐為の声音が不機嫌になつてゐる。

『あれくらい言わないとあいつも本気にならない』

そう、塔矢は逆境に強い棋士。俺みたいな本気で碁を指してないのは気付いている。だけど、それでいい。そんな俺に勝てないから今以上に本気になる。

それを佐為にぶつけたらどうなるか？佐為が強くなる。

佐為の成長を早める為に強い棋士を作らなければいけない。

じゃないと佐為は消えてしまうんだから。

第02局目

「ヒカルは今日暇？」

学校からの帰宅途中、隣を歩くあかりが尋ねてきた。

ズボンのポケットから取り出した手帳を開き確認。

「……特に予定はないかな」

「ならば、買い物付き合ってよ」

「何か買いたいものでもあるのか？」

「ちよつと気になってるアクセサリーをね」

嬉しそうに微笑む、あかりに毒気を抜かれたヒカルは仕方なく付き合う事になった。

「……(´)は(´)！」

あかりに案内されたアクセサリーショップは塔矢と対局した碁会所の近くだった。

偶然にも出来すぎている展開に笑いが込み上げてくる。

原作に沿って進まなかったから介入された？まさかな。

こんな世界に転生させた時点でルールなんて外れるに決まってるだろうに。

「……あつ!!キミー！」

大きな声が聞こえた方を振り向くと緒方精次がこちらに向かつて走ってきていた。

俺の正面に来た緒方精次はジロリ顔を確認してから腕を引っ張った。

「ちよつと付き合ってくれないかな」

「あーそういうのいいんで。別を当たってください」

嫌そうな顔をしながら断った。

「……つ、ば、バカヤロウ。そつち系の話じゃない。囲碁の事だ」

慌てて顔の周りを真っ赤になって否定する緒方精次。

「碁の事なら仕方ないですね。着いて行きますよ」

どうせ原作通りなら塔矢の親父である名人と対面するんだろ？

そんで対局する流れに行くわけだよな。ルートが分かっていると壊したくなる不思議。

「塔矢名人、あの子供を連れて来ました」

「誘拐されました」(ボソツ)

「ふん。君がうちの息子のアキラに勝った子供か」

「ああ、あいつな」

こちらを睨みつけるような眼光に僅かに震える。

この人、怖すぎだろ。小学生に向ける視線じゃねーぞ。

「さあ、座りたまえ」

「分かりました」

『おい、佐為。本気で倒しに行けよ』

『私は手を抜いた事はありません』

キツパリ断言するその台詞に突っ込んではいけないうか。

指導碁打つてる時点で手加減つて理屈に行き着いた俺が変なのか。

「石を3つ置きなさい」

「断る。もし対局するなら互先でしか打ちません」

「おい、塔矢名人に互先とか言ってるぞあの子供」

「若いもんは威勢がいいね」

「ワシには舐めてるように見えるがね」

外野からの雑音が鬱陶しい事この上ない。まあ、いい。

この対局で負けても仕方ない。まだ現代の碁を学んでいる最中の佐為だしな。

「5の5開き」

「3の8トドメ」

徐々に塗りつぶされて行く碁盤。俺にはさっぱりな展開にヘキヘキしながら佐為に指示された通りの場所に打つ。

「これはまずいな。先生の方が少し分が悪い」

緒方精次から聞こえた声に俺は心でガッツポーズをする。

佐為が勝っているんだな。よし、このまま行けるか。

◇◇◇

「……ありません」

塔矢名人の投了で幕を閉じた。互いに接戦だったと言わんばかりの視線を緒方精次から向けられる。

「君はいつから囲碁をはじめたかね？」

「5歳の頃から今で囲碁歴5年ですな」

「ほう。これで5年か。実に楽しかった」

「ありがとうございます！そろそろ友達が待っているかもしれないのでお先に失礼します」

そう言つて軽く頭を下げ、碁会所から退店した。

◇◇◇◇

「先生、どうでした？」

私に向かつて問いかけた緒方くんに溜息をついて答えた。

「彼は強い。今ではギリギリ接戦を演じられるけどこの先は分からない」

「どういう事ですか？」

「彼の打ち筋は古い。現代では悪手と言われ打たれなくなった手が見てとれた。だけど、私と打って行くうちにだんだんこちらの碁を学んでいるような打ち方をしてきた」

「それはどういう事ですか？」

「……私ができるのはこれまでだ。だが、一つだけ確かなのは近い将来、碁の世界は大きく変わる」

「そ、それは。彼がプロに上り詰めるからですか」

動揺を隠しきれない緒方くんには少し早いかもしれないな。彼もまた挑戦である。

そんな緒方くんに微笑むだけで答えた。苦虫を噛み締めたような表情をした緒方くんは私に挨拶をし、帰って行った。

進藤ヒカル。君が現代の碁を何故学ばずに過去の碁を学んでいたかは知らない。だが、君は私との対局で自分の過去の碁を否定した打ち方をしたね。

「私は楽しみでならない。過去の碁を極めた君が現代の碁を学びはじめたらどうなるのか」

緩んだ頬に手を当てて、久方ぶりの高揚だった。

◇◇◇◇

『神の一手に近い棋士と打つてみて佐為はどうだった?』

『……楽しかったです。私は徐々にですが、強くなつてると実感があります』

『それは現代の碁を学んだから?』

『それもありますが、強敵と対局する事によって得るものがあるんです』
『ふーん。そういうもんか』

原作だとヒカルが逃げて対局がお釈迦になったんだよな。

佐為の進化速度が急激に上がっている。もしかして佐為にだけ打たせてる影響で経験値的なものが佐為にのみ入ってるのかもな。

それはそれで面白い。どうせ俺は囲碁に興味はないし、早くプロになるかな。

正直迷うんだよな、院生になるかそのままプロになるか。

和谷や伊角さんとかと友達になるのもありだけど、時間を無駄にするのも勿体無いかもしれない。

あ、そう言えば原作だとネット碁も打ってたな。

『おーい。佐為そろそろ帰るぞ』

◇◇◇◇

PCを調達したいが両親に頼んでも買ってくれる可能性は低い。

自宅のベッドに寝転がりながらこの先の展開を考える。

頼める人間の選択肢はじいちゃんしかいないんだよな。

次の日、学校から直帰でじいちゃんの家に向かった。

「ヒカルか。今日はどうした？」

「どうしても欲しいものがあるんだけど、じいちゃん頼む！買ってください」

頭を90度下げた。チラツとじいちゃんの顔を見るとキョトンとしていた。

「ヒカルから頼み事されるのは碁盤以来じゃな。なんだ？欲しいもん言うてみ」

「PCが欲しい！理由はインターネットで世界中の囲碁プレイヤーと対局がしたいからですー！」

「……PCか。よしっ！買ってやる」

「……え？」

断られる前提でのお願いだっただが、あっさり通って逆に驚いている。

原作だと割と厳しそうなんだったような気がするけど。

次の週に俺はじいちゃんとPCショップに行きハイスペックPCを購入した。

佐為は囲碁だけやらせておけばいいけど俺もネットゲとかで使いたいからスペックを高いのを選んだ。

さっさと自宅に配送してもらい、回線を繋げてもらった。

両親には突然の業者訪問で驚愕していたけど、俺が何とか説明してネット回線と契約して晴れてPC持ちになれた。

それから母親には叱られたのはまた別の話。

「えーつとワールド囲碁ネットで検索と」

確かこんな名前だったような。あつたあつた。

一番上に表示されてるな。登録制だから、まずは名前だな。

【HIKARU】と名前入力をし、国籍はJPNと。よし設定は完了と。

◇◇◇◇

あれから2年が経ち、俺はネット廃人になっていた。

殆ど引きこもり状態で学校はする休みをし家でネトゲか佐為に催促された囲碁を打っていた。

『ヒカル〜。そろそろ、プロになりませんか?』

『そうだな。母さんもうるさくなくなって来たし、お金もお小遣いじゃ足りないし、プロに

なつてチヨコチヨコつと稼ぐか』

『またそうやって。塔矢が聞いたら怒られますよ』

久しぶり服に腕を通して着替え始めたヒカル。

『外は少し寒いかな？長袖にしておくか』

日本棋院前に到着した進藤ヒカル。

『ここ、前にも来ましたね！ヒカル』

『ああ、子供囲碁大会の時な』

『そう言えばヒカルは院生にならないんですか？』

首を傾げて尋ね始めた佐為に首を横に振った。

『囲碁はお前がやるんだよ。今更、子供と混じって学ぶ必要なんてないだろ』

『そうでした。ヒカルにも囲碁の楽しさを知ってほしいです』

『お金だけは楽しみなフヒヒ』

受付に座つてるおばさんに声をかけた。

「あのくすいません」

「どうしたの？」

「プロ試験の願書を貰いに来たんですけどもらえますか？」

「はいはい。……つて！ええええええええええ？ぶ、プロ試験受けたいの？」

「まあそんなところですよ」

やれやれとでも思われたのか願書は何とか頂けた。

必要書類は住民票と履歴書と健康診断書と棋譜を2枚と1万800円を送付してくださいだつてさ。

今日は5月の半ばだから申し込み受付の6月に出せばいいんか。

てか、お金どうしよう。またじいちゃんに頼むかな。

じいちゃんに頼んだら二つ返事で了承されて棋譜の一つはじいちゃんになった。

もう一つは塔矢アキラのでいいか。6月になり書類を全部揃えて郵送した。

『これでやっとプロへの道の第一歩か』

『ヒカルく。まだ外来の予選がありますよ！』
『どうせ、お前ならどうにかなるだろ』

7月半ばのある日、外来の予選日が決まったと報せる郵便物が届いた。

第03局目

8月1日は外来の予選日だった。

だったとは今日は既に8月8日である。

俺は予選日の前日にインフルエンザにかかり敢え無く参加出来なかった。

完全に治ったのが今日で、予選は完全に終わっていた。

一応棋院に連絡をしたらまた次回お待ちしていますと言われる始末。

何故こんなに不都合が起きるのか、原作から逸脱し過ぎると修正が入るのか？と疑問が湧いてくるも明確な回答には至らなかった。

佐為と相談するも次頑張りましょうと呑気な奴。やっぱ、轢かれたレールを行くべきか。

『なあ、佐為。院生になる気ある？』

『院生ですか？ 子供達が碁の勉強する場所ですよね？』

『お前より遥かに格下相手だから詰まんないと思うけどさ』

少し考えるそぶりをする佐為も俺を見て頷いた。

『行きたい！』

疑問符を浮かべるだけに終わった。

◇◇◇◇

日本棋院会館に俺とじいちゃん佐為がやってきていた。

「院生か。ヒカルは本気なんじゃな？」

「まあね。囲碁のプロを目指すなら経験しておこうと」

取って付けたような言い訳にじいちゃんは何度も頷いた。

「ヒカルが本気ならいいんじゃないよ」

「進藤君だったよね。案内するから付いてきて」

エレベーターに乗り込み6階まで上がった。予約形式みたいだし、俺の前の奴もいるんだよな。

「こちらに座って待っててね」

案内された和室の部屋。碁盤が置かれ座布団が敷かれていた。

暫く待ちの状態。試験つてそんなに難しくない筈だよな。

ここら辺の原作はあんまり覚えていないからな。あ、来た。

「お待たせしてすまないね」

眼鏡をかけたおじさんが対面に座った。

「あ、大丈夫です。じいちゃん、時間かかると思うから喫茶店で待つてて」

「そうじゃな。先生、お願いします」

先生に一礼してからじいちゃんは席を外した。

「それじゃあ、まずは志願者と棋譜を見せてもらえるかな」

「あ、はい。これになります」

鞆から取り出した棋譜を渡した。

「3枚とも君が白番なんだね」

◇◇◇◇

「拝見させてもらいますね……これは!？」

手に取った棋譜を見て絶句した。古い打ち筋が垣間見えるが、相当な打ち手だ。

先程の棋譜を戻して一番上の棋譜に付いて尋ねた。

「進藤平八って人は？」

「さつき一緒に来てたじいちゃん」

おじいさんも相当打てている。それをあつと言う間に勝利しているのか。

「水田という方は？」

「碁会所の常連のおじさんです」

この水田という方は院生の上位陣と遜色ない棋力だと分かる。

その相手にも寄せ付けない碁で圧倒。凄いですね。

「最後は名前が空白ですね。この相手を教えてください」

「あ、そいつは塔矢アキラ」

そういう事ですか。先ほど絶句した理由が分かりました。

塔矢先生の息子をこうも翻弄するとは。

これは正しく指導碁ですね。ここまで差があるんですか。

将来が楽しみな子供が入って来ましたね。

◇◇◇◇

「……進藤くんの棋力は大体分かりました。ここまで打てるのでしたらそのまま合格でも構いませんが、私と打ってみませんか？」

突然振られた対局にどうするか迷う。正直、このまま打つメリットが皆無なんだよな。

合格ならさつきと帰宅してゲームでもしていたい。

「えーっと」

「申し訳ない。私の名前は篠田と言う。自己紹介遅れてすまないね」

「どうやら誤解されたみたいだ。」

『ヒカル。打ちましょう』

『いや、でもさメリットないんだよ?』

『この者はヒカルの力を自らで試してみたいんですよ。だから、打ちましょうよ』

『あくもう、どうせ佐為が打ちたいだけな癖に。分かった。分かった。その代わりにさつきと仕留めてくれよ』

「あの、篠田先生。もし先生に勝てましたら1組から始めさせてもらえませんか?」

佐為に打たせてる立場から言えば2組から初める理由ないんだよな。

原作だとヒカルが成長していく事に意味があつた訳だが、俺の場合は佐為が打つから意味がない。

「……そうですね。規定ではみんな下から始めるんですが、私に勝てたら良しとしま

しよう」

「本当ですか!」

「正し、互い先での対局になります」

「構いません」

◇◇◇◇

繰り広げた上辺は既に死に絶えていた。3手前の返しを間違えてしまったと確信した。

私は眼前に広がる碁盤を見て溜息をついた。これが小学6年生の棋力だと言うのか。

確かに塔矢アキラとの棋譜は凄かったが、プロで揉まれた私も自信があった。

だが、この碁は終わっている。

「……負けました」

自らの敗北を噛み締め頭を下げた。完敗だった。

「ありがとうございました」

飄々とした彼を見て私は理解してしまった。

彼は私の事を見ていない。遙か先を見据えて打っているのかもしれない。立ち上がった進藤さんに暫し待ってもらい、私は川田先生を呼んだ。

彼に進藤くんの案内を任せ、私は誰もいなくなった部屋ではじめて涙した。

負けた悔しさの涙ではなく将来のタイトルホルダーの誕生を垣間見たこの高揚感に。

この先、長い碁の世界に君は渡るだろう。

自分を信じて赴くままに進みなさい。

◇◇◇◇◇

『ふあく勝った勝った。佐為どうだった？』

疲れた身体をコリコリしながら川田先生の後をついていった。

『大変、参考になる碁でした』

『そうなの？あの人プロだけど院生の先生だぜ？』

『教育者なんでしょう。彼の碁には人を導く碁の打ち筋でした』

「進藤くん、対局の組み合わせ表やお知らせはこの封筒に入れてあります」

そう言つて渡された封筒の中身から対局表を取り出した。

「あの、対局が来週から組まれているんですが……う？」

そこに書かれていたのは来週の土曜日すぐに対局が記されていた。

ちよつと早くないかな。普通は来月とかでしょうに。

「ん〜ごめんね。これは篠田先生が作成してるみたいだからどうにもならないだよ」

「そうなんですか」

ハアと溜息をつき、隣を見たら佐為は嬉しそうに組み合わせ表を見ていた。

「進藤くん、これからまだ時間あるかな？」

腕時計で時間を確認した俺は川田先生に頷いた。

「なら、少し研究部屋覗いて行つてみたらどうですか？」

院生が集まつてる部屋だよな。

畳の引かれた部屋で60人以上の院生が碁を打っていた。

よく見ると俺より若い子供もいるな。佐為は院生達の対局を見て回り始めた。

俺は対戦表が置かれている場所に向かった。目的は原作で院生だった人の確認である。

伊角慎一郎 1組 06位

本田敏則 1組 14位

和谷義高 1組 17位

奈瀬明日美 1組 18位

飯島良 2組 17位

岸本薫 2組 20位

こんなもんか。他に知ってる名前はないかな。福とか越智がまだいないのか。

それより、和谷弱いな。この頃はまだ、こんなもんなんだな。

それから軽く、来週から1組で最下位から参加する進藤ヒカルですと挨拶をして部屋を後にした。

じいちゃんと喫茶店で落ち合い、院生に合格した旨を伝え家に帰宅した。

◇◇◇◇

院生の対局日になった。

エレベーターを上がり、靴を下駄箱に仕舞い研究部屋に入った。

時間的にギリギリに来た所為か、既にみんな座って対面の対局相手を見ていた。

「進藤くん、おはよう。少し遅いからもう少し早く来ようね」

「篠田先生すいません」

「今日の相手は吉野くんだね。右奥の空いてる所が進藤くんね」

言われた場所に向かい座布団に座った。

対戦相手の顔をチラと見て挨拶をした。

「はじめまして、進藤ヒカルと言います」

「こちらこそ。吉野剛ってんだ」

「それでは始めてください」

篠田先生の挨拶で対局が始まった。

「お願いします」

「お願いします」

◇◇◇◇

「……ありません」

「ありがとうございます」

佐為の力技による中押し勝ちだった。相手の吉野は口をパクパクさせてのされた碁を呆然と眺めていた。

俺の言葉は聞こえていないのか、相手からの返答はない。

仕方なく、席を離れ対戦表に白星を付けた。

「どう？勝った？」

「うわあ」

突然背中を突かれて驚いた声を上げてしまった。目の前にいたの女だった。

「そこ！まだ対局中の生徒がいるので静かにしなさい」

二人で頭を下げ、研究部屋を出て行くことにした。

「記録をつけてるって事は勝ったって知ってるだろ」

「ふふふ。知ってた」

「えーつと、誰だっけ？」

「奈瀬！奈瀬明日美。貴方より2歳年上なんですからね！」

「んじや、改めて。はじめまして進藤ヒカルです。ヒカルって呼んで」

「私は明日美でいいわ」

それから暫く次の対局まで世間話をした。

中々整った容姿をしている明日美は囲碁のプロ棋士を目指し院生になったみたい。

親からも応援されて本人も努力している。

プロになるなら受かりやすい女流枠で受験したらと言ったら舐められるから嫌だと

言われた。

彼女はちゃんとした道を同じ立場で進みたいと。眩しい。眩しすぎる。

だって、俺は他人（佐為）の力で囲碁をやっているんだから。

これが俺と明日美のはじめての邂逅だった。

◇
◇
◇
◇
院生になって早、2ヶ月が経った。俺は今では1組1位になっていた。

そして遂に俺の正体がバレてしまった。

第04局目

「へえ〜ここがヒカルの部屋ね」

明日美が俺の部屋を見渡して言った。

何故、明日美が俺の家に来ているのかというと、先日俺が1組1位を取った事でお祝いをしてくれるみたいだ。

まあ、悪い気はしないよ。可愛い子と二人つきりでいれるんだからね。

「飲み物とつてくるから適当に座ってて」

◇◇◇

どうしてこうなった!?

目の前に向かい合って俺と明日美は碁を打っていた。

あれから、たわいのないお喋りに興じてた筈が突然、明日美が「ねえ、指導碁をお願い」と言われ一局ならと了承したのが悪かった。

既に20局はゆうに超えていたりする。佐為は乗り気で一生懸命に指導碁を打っていた。

まあ、実際に打ってるのは俺なんだけどな。

「ねえ、ヒカル。ここつてどこが悪かったの？」

『おい、佐為。説明してやれ』

『ヒカル！私は奈瀬さんとは話せまんよ!!!』

『あー！くそつ。めんどくさい』

『そんな事言わないでちゃんとやりましょうよ』

それから明日美に聞かれた事を佐為の通訳として何度も答えた。

正直、普通に碁を打つより疲れたわ。

指導碁の仕事とか原作であるみたいだけどやりたくないわ。

「はあく疲れた。明日美、今日はこれで終わりな」

心底溜息をつけて明日美の方を向いた。

「あ、ごめん。ヒカルのお祝いだったのにこんな事になっちゃって……」

「別にいいけど、改めて自分に指導碁は向いてないと自覚したよ」

「えー！ー！凄く勉強になったし、分かりやすく説明してくれて私は良かったと思ったんだけどな」

「まあ、明日美だけなら偶になら考えてやらない事もないかな」

「ほ、本当!?!」

俯いてた明日美が突然ガバツと体を起こし俺の方に詰め寄った。

「たまにならな」

「よかった。最近、順位が伸びなくてずっと勉強してたんだけど、中々結果が出なくてね」

明日美の順位は16位。そう1組の真ん中の位置だったりする。

俺が来てから2つほど順位が上がっているがその程度。

「明日美ってネットしたりする?」

「ネットならたまに買い物とかに使ったりしてるよ」

「ならこれはどう?」

待機状態のPCを立ち上げて、見て欲しいページを開いた。

『ワールド囲碁ネット』ね。聞いたことあるけどやった事はないかな?」

「なら、やろうぜ!ここはアマチュアも偶にプロも現れたりするから強い人はそれなりにいるよ」

「そうなんだ。面白そうだし帰ったらやってみるね」

彼は気付いていなかった。ログイン状態の名前を。

ネット囲碁で最強を誇る【HIKARU】という文字を見つけていた少女がいた事に。

◇◇◇◇

「はあく今日は楽しかった」

ヒカルに駅まで送ってもらい自宅に着いた明日美はベットに倒れこみ、今日の事を思い出した。

1組1位のお祝いと称しヒカルのお宅に訪問。男の子の部屋に初めて足を踏み入れた時はドキドキしてしまった。

ヒカルは気付いていなかったけど、少し緊張していた。

それから頼み込んで指導碁を打ってもらい、改善点をアドバイスしてもらった。

私は院生の先生たちにも指導碁を何度も教えを請い続けたが、大した成果は出なかった。

でも、今日ヒカルに打ってもらった指導碁は今まで一番為になった。

先生方には悪いけど、私はもう先生たちに教えを請う事はほとんど無くなると思う。ヒカルは偶になら打ってくれると言ったから今のうちに今日の事をノートにまとめよう。

「あ、忘れてた」

ヒカルにワールド囲碁ネットで世界中の人達と打てるからオススメされてたんだっ
た。

部屋に置いてあるノートパソコンに電源を入れ、ワールド囲碁ネットと検索した。

「ハンドルネームは『ASUMI』と。そう言えばヒカルも本名だったよね」

「そうだ。ヒカルの棋譜が残ってないか調べてみよう」

んふふ。もしネットに残っていたら収集して糧にしよう。

えつと、『ワールド囲碁ネット HIKARU』と。

「ええええー?!?!」

そこに表示されたのはネット碁、最強の棋士『HIKARU』をまとめているサイト
だった。

スクロールして何度もヒカルがネットで打っていた碁を見詰めた。

「これ、ヒカルだ」

何度も何度確認してヒカル本人だと分かってしまった。

でも、これはまずいよね？

プロの棋士との棋譜もあるから、近いうちに騒ぎになる予感がひしひしと感じてしまった。

私は立ち上がり受話器を手に取りヒカルに連絡を取った。

◇◇◇

突然、明日美から電話がかかってきた。

内容が内容だけに焦った声で事細かく説明された。

電話を置いた俺はどうしようか？と考え始めた。

佐為のスキルアップの為にを行った行為でこちらが煩わしくなるのは頂けないな。

かといってここで辞めようものなら佐為が荒れるしな……。

また、吐き気を催す事になる事態は避けたい。

『なあ、佐為』

『どうしましたヒカル？』

『明日美にネット碁の俺を特定されたんだけど、どうしようか？』

『え？ヒカル、特定されてマズインですか？』

『ん？そう言えばあれ？……………。特に問題ないような気がしてきた』

そうだよ。原作ではヒカルも碁をやったから問題になった訳であって、俺の場合は佐為一人が打ってるだけだ。

突然弱くなったり、突然強くなったりとかだと可笑しいが強さが一定なら例えプロに勝つてようが関係ないよな。

でも特定されて今から騒がられたりしたら色々面倒なのは確かだ。多分、明日美もプロに勝つてた事が公になれば色々と煩わしい事が出てくるってことを言いたかったんだな。ならここは原作通りに行くかな。

『なあ、佐為。ハンドルネームをS A Iに変えてもいい？』

『構いませんが…………どうしてですか？』

『プロになる前から騒がられても困るんだよ』

『そういう事なら構いません』

◇◇◇◇

院生になり9ヶ月が経ち、5月になった。

今日は若獅子戦の大会だった。

「何とか間に合った」

「遅いわよヒカル」

「遅いですよ進藤くん」

明日美と篠田先生に怒られた。

『仕方ないだろうに。佐為が今朝の朝方までずっとネット碁をやめなかったんだから』

『それは先程から何度も謝ってますよ』

『なら今日はさっさと勝ちにいつてくれよ。帰ってすぐに寝たい』

『分かりました』

「えーお静かにしてください。ただ今より第8回若獅子戦を行います。では、席に順に付いてください」

名前を呼ばれていた人達が続々と指定された座席に付いていく。

俺の名前も呼ばれ席についた。対戦相手を確認し、軽く苦笑し試合のアナウンスを待ただけだ。

「互い先ですが、院生が黒を持ちます。それでは始めてください」

「お願いします」

「お願いします」

◇◇◇◇

俺の名前は沢野茂、2段になったプロ棋士である。

そんな俺は目の前の碁盤を睨みつけながら溜息をついた。

小学生の子供が対戦相手と知った時は余裕だろと思っていた。

指定された座席を探し座席についた。対戦相手はまだいなかった。

最初はバカにされたと思った。目の前の院生が座席に着くなり俺の方を見て嘲笑のような笑みを浮かべた。

手を出しそうになる自分を抑えた事を褒めてやりたいくらいだった。

同期の中では一番早く2段にまで上がり順調な棋士ライフを送っていた。

この、俺を！院生のガキが舐めた真似をしてくれたな。

子供だからハンデをしてやろうと思つてた気持ちは消え失せ叩き潰す事を改めて決意した。

そんな風に思っていた。

俺の目の前に置かれた碁盤は既に劣勢。目の前の子供はただのガキではなかった。

ハンデを負つてここまで追い詰められたなら言い訳もしようがあつたが今回は実力差で圧殺された。

「ありません」

「ありがとうございます」

子供の方は飄々とした然とした姿でその場から離れていく。

この日、一人の棋士は心を入れ替え一層碁の勉強を始める事になった。

◇◇◇◇

決勝戦まで中押し勝ちで勝利した。佐為は着実と俺との約束を待ってくれたらみたいでありがたい。

次の対戦相手は『倉田厚』か。確か、原作だと強敵だった記憶だよな。

原作の進藤ヒカル並みの成長チートタイプだよな。

子供の頃から碁をやっていたわけではない本物の天才。

ヒカルは佐為というお手本的存在がいたから強くなれたけど、倉田厚とかいう奴は一人で成り上がった強者。

「ん？キミがオレの対戦相手か？」

「そうだけどあんたは？」

「え？オレのこと知らねーの？」

「全然」

「いずれ、名人や本因坊を手に入れるのはオレだ！」

「はあく」

「何だよ何だよ、溜息なんて付いちまって。それよかキミはプロ？」

「院生ですが？」

「院生が決勝まで勝ち上がってくるなんて他のプロは情けないな!!!」

倉田さんの声が会場に響き、俺に負けたプロ達が肩を落としていた。

「こいつ空気が悪くなる事言うな。」

『おい、佐為。こいつさっさと仕留めろ』

『どうしたんですか？』

『こいつの所為で他のプロ達に目の敵にされたんじゃ敵わないんだよ』

「倉田さん、本気で戦いませんか？」

「えっーと名前なんだっけ？」

「進藤です。進藤ヒカルです」

「進藤ね。よし、俺に勝てたらサインやるよ」

「いや、いらないつす。どうせなら今度焼肉でも奢ってください」

「まあ、それでもいいよ」

◇◇◇

「負けました」

舐めていた？いや、本気で打った筈だ。勝負を挑んできた時は子供の無邪気さから来る虚勢だと思っていた。

だが、結果は中押し負け。本物だ。進藤ヒカルは本物だ。

塔矢行洋でも桑原のじーさんでもない。まだ院生にいる子供だ。

なのに、この碁から滲み出る打ち筋は歴戦の棋士にしか見えない。

こいつは只の子供ではない。いや、子供ですらない。

れつきとした棋士がここにいる。

若い世代がここまで登ってきていたのか。

来るぞ、若い世代の波が。

◇◇◇◇
この日、囲碁界は新生の棋士の誕生に歓喜した。